

# □ レコード (CD&DVD)

諸 石 幸 生

クラシックの世界は、ほぼ例年通りの動きであった。それは例年このページを書くに当たって、参考にしてている「レコード・イヤーズブック2020」を見ても、明らかなことである。但し、発売総数が2003年では約2500点、2006年では約2200点であった。ところが今年は、総数で1800点程度ということになるから、これは明らかに減少傾向にあるということであろう。ちなみに、この数値には各年度のビデオディスクの数が含まれている。

	新譜	旧譜 (再発)	計
交響曲	153 ( 96)	66 (190)	219 (286)
管弦楽曲	57 ( 30)	16 ( 94)	73 (124)
協奏曲	102 ( 53)	44 ( 82)	146 (135)
室内楽曲	54 ( 53)	43 ( 28)	97 ( 81)
器楽曲	149 (190)	89 ( 53)	238 (243)
オペラ	55 ( 2)	51 ( 16)	106 ( 18)
総計	570 (424)	309 (463)	879 (887)

( ) 内は、2018年度の実績

さて、それでは昨年度第57回「レコード・アカデミー賞」の受賞作を見てみよう。「大賞」は、室内楽曲部門で「古典四重奏団」(録音2014年~2018年)がシヨスタコーヴィッチの弦楽四重奏曲全集 [クレアシオン® CRT 2201~5 (5枚組)] で受賞となった。同一メンバーで創立以来29年目を迎えた「古典四重奏団」であるが、メンバーは「2011年にバルトーク全集をリリース後、ベートーヴェン全集を後にしてでも挑戦したかったのが同じ20世紀のシヨスタコーヴィッチです。その作風はバルトークの対極にあるようにおもわれますが、ふたりに通底する『悲しみ』に大きく動かされていました。結成直後から取り組み始め、全曲演奏を重ねてきました。作曲家に対してどのような立ち位置を取るかということは演奏の指針に欠かせませんが、私たちはシヨスタコーヴィッチの傍らに寄り添い、ひたすらその声を聴くことに集中しようと試みました。この作品集がより多くの方々に愛されますよう、心から祈っています。」と語っている。次に、「大賞・銀賞」は、器楽曲部門で佐藤俊介のJ.S.バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全曲 [アコースティックリバイブ® K K C 6062~3 (2枚組)] である。ライナー・ノーツも含め、細部まで目の行き届いた丁寧な制作姿勢は高く、このアーティストの真摯なスタンスの直接の反映でもあろう。そして、「大賞・銅賞」は交響曲部門でアンドリス・ネルソンス指揮、ウィーン・フィルによるベートーヴェンの交響曲全集である。なお、この全集は「ベートーヴェンの生誕250年」となる今年にリリースすることを目標に制作されたもので、ネルソンスは「ベートーヴェンの音楽が絶えることなく取り上げられてきたのは、まさに彼が天才であることの証です。音楽史に対して他に類を見ない貢献を果たし、世界をそのユニークな視点で見つめてきたベートーヴェ

ン。音楽づくりにおける卓越したパートナーシップを発揮してくれた素晴らしいウィーン・フィルハーモニーに心から感謝を捧げると共に、ドイツ・グラモフォンの制作とレコーディング・スタッフにも感謝の意を表したく思います。」と語っている。

この他、オペラ部門で話題になったサリエリの大作・歌劇『タラール』全曲 (世界初録音) が名演であった。モーツァルトの陰に隠れてしまった音楽家の復権と、新しいオペラの面白さの発見は、オペラ全曲盤の使命を果たしたと言えよう。もう一点、間宮芳生のオペラ『ニホンザル・スキトオリメ』全曲である。詩人木島始による台本は、現代の寓話にも似て興味深い時代を超えた内容であり、音楽にも時代を超えて訴える力があると思える内容である。

また、スペイン系ユダヤ人の血を引いてイタリアに生まれた作曲家マリオ・カステルヌオーヴォ・テデスコ (1895~1968) が、スペインが生んだ偉大なる詩人であるファン・ラモン・ヒメネス (1881~1958) の散文詩138編から28編を選び作曲をした、ギターと朗読のための作品「プラテロとわたし」は、大萩康司の詩情溢れるギター演奏と波多野睦美の丁寧な日本語訳と抑制された朗読と歌により、素敵な作品として記憶される。

2019年のレコード界は、素敵に数の減少は見られたが、確実に聴き手の心をめざしたCD創りが行われており、将来への不安も消し去られたと言えよう。